



レクリエーションレースを体験した現地の体育教師ら

教師4人や教科主任にも授業の改善方法などを提案している。しかし、変化を促すのは簡単ではなかった。体育担当の教師4人のうち2人は、体育が専門ではなく他教科兼任の教師だったため、そもそも指導のモチベーションが低いことも壁になっていた。

**授業の幅を広げたい
教師のスキルアップの場を**

国土が比較的小さいウガンダでは、各地で体育に関する活動をすすめる協力が集まり、共同で運動会などを企画・実施することが珍しくない。今年3月には、ナビンゴ校を会場に体力測定会を共同開催する計画があった。しかし、新立

さんの胸には、体育教育の定着には、生徒対象のイベントだけでなく、教師向けのアプローチが必要なのでは、という思いがあった。共同イベントなら各校から多くの教師に参加してもらえらる。この機会を生かし、体力測定会から教師向けのワークショップに内容を変更することを新立さんが提案すると、他の隊員も賛同。それぞれの配属先の教師に参加を呼

び掛けると、予想を上回る反響があった。こうして、ワークショップの開催が決まった。

企画の内容は、体育教育の目的についての講義、実技講習、グループディスカッション、生徒を交えた交流試合の4本柱だ。協力が一方的に講義するのではなく、現地の教師が主体的に関わることで、横のつながりを深めたり、情報交換の場としてほしいと考え、講義の一部は配属先のロバート先生に頼んだ。「準備段階から積極的に協力してくれた彼は、身体能力の向上にとどまらず、子どもの心の発達にも役割を果たすという体育教育の意義を熱く語ってくれました」と新立さんは同僚の活躍を喜ぶ。

新立さん自身は、司会進行役と実技講習を担当し、レクリエーションを紹介した。ワークショップに参加した現地の教師ら12人が顔を合わせるのは、当日が初めて。最初は緊張した面持ちだったが、実技講習を通じて二人三脚や後ろ走りリレーなどに初めて挑戦すると、自然と笑顔がこぼれた。参加

者は、「チームワークの重要性を体感できた」「授業の新しいアイデアを得られた」と話し、良い刺激を得たようだ。

その後のディスカッションでも、活発に意見を交換し合う教師らの姿があった。体育の課題は他校とも共通点が多いことを知った参加者たちは、互いに共感し、解決法について真剣に話し合っていた。

「当日は、配属先の副校長も見に来てくれたんです。日々、試行錯誤しながらの活動ですが、今回の経験で、体育担当の先生たちとの距離が一層縮まり、配属先とも良い関係を築いてこられたことを再確認できてうれしく思いました。」

そんな新立さんには、ハンドボール部の指導というもう一つの期待も寄せられている。ナビンゴ校には、もともとハンドボール部はなかったが、放課後、興味のある生徒に教えてみたのが始まりだった。「まだまだ、やる気やレベルの差はありますが、特に真剣に取り組む生徒の間では、信頼関係やリーダーシップの意識が芽生えています。継続することの重みも実感し始めているようです。」

7月の全国大会で勝たせてあげたい。そう願う新立さんの下で、生徒たちはスポーツを通して、自信や物事に取り組む姿勢という人生の大きな財産を得ている。



[右]2年生の授業で、2人組になって行うストレッチの方法を指導した
[左]ハンドボール部の指導の様子。放課後、遊びの延長で教え始めたが、部活として継続して指導を続け、試合の経験を重ねてきたことで今は格段に上達している



体育教育の目的についての講義を担当したロバート先生

アフリカ東部の内陸国ウガンダで体育の授業が導入されたのは、わずか5年前の2011年のことだ。同国スポーツ教育省が、日本の中等学校にあたるセカンダリースクールに体育を導入することを決め、同時に全国32の公立学校を「スポーツ推進校」に指定した。

首都カンパラに隣接するワキン県のトリニティ・カレッジ・ナビンゴ校（以下ナビンゴ校）もそのうちの1校だ。1〜6年生の約1500人の生徒が学ぶ同校は、1942年創立の女子校で、国内屈指の進学校。医師などとして活躍する女性を輩出してきた。

スポーツ推進校に指定されたナビンゴ校だが、体育という新しい教科を実践する環境は十分に整っていなかった。「1クラスの人数はおおよそ80人。一人で指導するには多すぎます。一方で、ボールは5個しかないなど用具が不足しているため、ほとんど活動に参加しないまま授業を終える生徒も少なくありません」。そう話すのは、おとし7月から青年海外協力隊として同校で体育を指導している新立みずきさんだ。

幼いころから野球やハンドボールなどに親しんできた新立さんは、大学で運動生理学を専攻し、

「チームワークや協調性を育てることもレクリエーションレースの目的の一つ」とワークショップで教師らに解説する新立さん



体育教育を担う 教師らに思いを託す

ウガンダの学校では、体育はまだまだ“新しい教科”だ。生徒にスポーツの楽しさやそこから得る学びを体感してほしい。そんな情熱を胸に、現地の学校で体育教育の意義を伝え、教師らの指導力向上を支える青年海外協力隊がいる。

